

ミステリ読書案内

2019. 12. 12 発行元

第 12 号 伊藤 剛

F・W・クロフツ ベスト表

前号は鮎川哲也。ちょっと順番が逆になってしまったが、今号がF・W・クロフツ。鮎川の出発点にクロフツがいることは前号に書いた。ミステリの歴史の中で、目立たないが、大きな城を作り上げている作家。

《F・W・クロフツのベスト表》

1. 樽
2. スターベルの悲劇
3. ポンスン事件
4. フローテ公園の殺人
5. マギル卿最後の旅
6. フレンチ警部とチェインの謎
7. フレンチ警部最大の事件
8. ギルフォードの犯罪
9. 海の秘密
10. チョールフォント荘の恐怖
11. 列車の死
12. フレンチ警部と賭博船
13. フレンチ警部と紫色の鎌
14. フレンチ油田を掘り当てる
15. 黄金の灰
16. 製材所の秘密
17. 蜘蛛と蠅
18. 英仏海峡の謎
19. ヴォスパ一号の遭難
20. 山師タラント
21. クロイドン発 12 時 30 分
22. フレンチ警視最初の事件
23. ホッグス・バッグの怪事件
24. 関税品はありませんか
25. 二つの密室
26. 船から消えた男
27. クロフツ短編集 1 (短)
28. 死の鉄路
29. サウサンプトンの殺人
30. シグニット号の死
31. クロフツ短編集 2 (短)
32. 見えない敵
33. 二重の悲劇

短編集で日本語訳になっているのは、
創元推理文庫の2冊だけだと思う。

名作『樽』からのスタート

フリーマン・ウィルス・クロフツは、アイルランド生まれのイギリス作家。1879年～1957年。

鉄道技師などの仕事をしていましたが、40歳の時に『樽』を出版して、ミステリ作家としてスタートを切った。1920年のことである。ヴァン・ダインよりもエラリー・クイーンよりもJ・D・カーよりも古いのだ。本格推理黄金期に入る前に、クロフツが「この形のミステリを作ったのか」と思うと、その歴史的価値は非常に高い。

世界各国の中では、一番日本で支持されているのではないかと思う。外国では既に忘れ去られているかも……。鮎川にしてもそうだし、松本清張や西村京太郎だってクロフツを意識した部分があるような気がする。

江戸川乱歩は『樽』をあまり好まなかったようで、『スターベルの悲劇』の方を一番に推している。乱歩の好みがわかるような気がする。

フレンチ警部の捜査と推理

クロフツのミステリは「アリバイ崩し」が中心になっているものが多く、そこに鉄道をはじめとする交通機関が上手に組み込まれている。20世紀初頭の世の中の変化をミステリの中に生かそうと工夫したのだろう。

クロフツの作品に登場してくる探偵役はフレンチ警部。それ以前のシャーロック・ホームズをはじめとする「天才型探偵」ではなく、「現実型・実務型探偵」を持ってきたことに意義がある。警察官であるのは当然だが、ごく当たり前の捜査を地道に積み上げる。

何度も壁にぶつかりながらも執拗に事件・謎を追求する。刑事コロンボは容疑者本人に執拗に絡むが、フレンチ警部は越えられそうもない「壁」にぶち当たりながら、頭で考えて必死に何度でも「謎」に絡む。その話の流れが上手い。

「倒叙もの」にも見どころ

クロフツはアリバイ崩しのミステリだけでなく、「密室もの」にも挑戦しているし、犯人側から描くという「倒叙もの」という形を取り上げている。犯罪を犯した者の心理を描くことに重点を置いたり、完全犯罪を目指したのに、どこかでミスをしてしまった……などの形式をミステリの中に取り入れた。『クロイドン発 12 時 30 分』が倒叙ものの代表作である。

私は、個人的な好みで言うと、この「倒叙」という形式があまり好きではない。犯罪に追い込まれていく人の心理や、犯行後の気持ちの変化などを細かく文として描かれると、「これは読み進みたくない」と思ってしまうのだ。

番町書房の『i f ノベルス』……私が持っているクロフツの『スターベルの悲劇』は、番町書房(主婦と生活社内)から出版されたi f ノベルスの中の一冊。このノベルスは、昭和51～52年ごろにかけて、20冊程度の海外ミステリを出版した。長くは続かなかった記憶がある。

作品の数は、スパイ物・ジュニア物を入れて35冊程度と言われているので、私が読んでいる33冊で、ほぼ全部を網羅していると思う。

既に前の号にも書いたとおり、これらのうちの創元推理文庫から出ている『フローテ公園の殺人』は、絶版本としてよく取り上げられ、今は1000円台の値段がついてネット上にも出てきているようだ。